

論壇



富田 寛

従来のアナログ録音によるLPレコードよりもその再生音が

高忠実、つまり「生の音」に近いとされているデジタル録音によるコンパクトディスク(CD)に関して、最近、批判の声を聞くことが多い。

「LPの方が音に潤いがある」とか「CDの音は空虚で硬い感じだ」などといったあくまで感性的で、好みの範囲をでないものが多いが、その中で「CDの再生音楽には一定のピッチ(音の高さ)がない」といったLP時代には決してなかった音楽芸術の根幹を揺るがす重大な指摘があるのである。

この指摘が事実であれば、CDの再生音はもはや音楽とはいえず、音階や協和音をつくりにくい単なる騒音、つまり「非楽音」でしかなく、人間の情懷を純化し、精神生活を豊かにしてくれるCD音楽は、そのゆがめられた「非楽音」によって逆に

と疑問をもちつつ、今度は微小な音程が得られる電子機器(デジタル式でない鍵盤楽器)のラを四四〇から一ツツ刻みに高くしてゆき、前記CDのラと照合してみたところ、なんと四五六ラまでのところでも合うという「生の音」や「LP」にはあり得ない不思議な現象を確認したのである。この事実から、私はCDの音には半音近い幅があり、一定のピッチはないと判断した。

さらに私はこの実験の結果に

CDに隠されていた欠陥

階一ラの音によって、その真偽を確かめてみた。

このCDのラは、NHKの時報でおなじみの国際標準音高の四四〇と同じピッチのラを録音したものである。このラとこ

れよりも半音高いピアノの黒鍵(こっけん)を照合してみると、明確なはずの半音の差ははっきりせず、違いはほとんどない感じで聞かえたのである。CDの音にはやはり何らかのピッチ異常があるのではないか

がない。そしてこれを将来的にも改善することは不可能である」との結論に達し、この合成音が人間の感覚に及ぼすその害を警告しているのである。私の実験は、まさにこの倍音破壊を裏証するものであった。

近ごろ、「生の音」よりも「CD音」を好むといった傾向の愛好者も多いが、これはすでに聴覚がその「非楽音」にまひし慣らされてしまったあかしではなからうか。味覚に快い加工食品ほど「肉体」をむしばむ公害の元凶として騒がれるケースが多いが、デジタル音もいわば加工された合成音であり、これが聴覚に快いということは、そこには何か恐ろしい落とし穴が隠されているのではないかとしか思えない。

基つき、例えば長調、短調の区別が不明確、調性の不在、協和音が得られないなどといったCD音楽の問題点を調べ、一昨年に続いて本年も日本音楽教育学会で発表した。

実はこれらのことについては、メルコアジャパン付属音響研究所(東京・目黒)ですでに数年前から追究していて、「デジタル録音によるCDの音は倍音が破壊されており、実際的には基音は存在せず一定のピッチ

は、メルコアジャパン付属音響研究所(東京・目黒)ですでに数年前から追究していて、「デジタル録音によるCDの音は倍音が破壊されており、実際的には基音は存在せず一定のピッチ

から、ピッチの異常は演奏家から原因がある」との見解を私とメルコアに示し、一方、共同開発社のオランダ・フィリップス社はこれを録音の問題として、今後正していくとの見解をメルコアに示した。

CDは、いま年間、億単位の枚数で売れ、ますます浸透しつつある。公教育の場はもとより、胎教や音楽療法などの領域にまでも広く食い込んできている。しかし、こうした問題が明らかになった以上、少なくともLPレコードの生産を続けるなどの措置が必要なのではないか。

(元音楽教師、日本楽友協会 常任理事 投稿、榎木 泉)